

ドクムギ属の分類 (生活体の特徴を基礎とした)

藤 本 義 昭

神戸市内のドクムギ属にはホソムギ *Lolium perene* L.、ネズミムギ *L. multiflorum* L. の二種類と稀にドクムギ *L. temulentum* L. の3種が見られる。

この3種は出穂前の草状が皆非常によく似ていて類別がはなはだ困難である。これらは欧州原産の多年生及び1年生草本で、ホソムギ、ネズミムギの2種は牧草として種々な条件に適し、馬、牛、羊が嗜好する。併しドクムギは *Temulin* という有毒成分を含んでいるために神経中枢をまひし散瞳作用もあるといわれる。特に妊娠馬では流産する恐れが多分があるので警

戒される。毒害についてはドクムギそのものが有毒であるか、又はこれに寄生する有毒菌によるかはまだ明らかでないといわれる。ドクムギの中には菌に侵されやすい系統のものがあるといわれる。このドクムギには芒があるのが普通であるが、中には芒のないノグナシドクムギ *L. temulentum* L. var. *teptochaeton* A. Be. というものもある。しかし自分の採集範囲では残念ながら見ることが出来なかつたので又の機会にゆずることにしたい。

本属の出穂時には次のような諸点で明らかに区別される。

	ドクムギ	ネズミムギ	ホソムギ
苞	畧小穂と同長	小穂の1/3長	畧小穂と同長
芒	外穎の2~3倍、10~16mm.	外穎と同長、若しくは4/5長、4~6mm.	芒はない。
外 穎	中心部の2脈平行。背面に刺状突起がある。先端両側に歯牙状突起がある。	両縁は硝子状、先端の両側に歯牙状の突起がある。	5脈あり中心部及び両側の3脈は特に顕著である。先端は凹む。
内 穎	両側に刺状突起がある。脈は不顕著である。	背面に刺状突起がある。3脈が見られる。	縁辺に鋸歯がある。4脈のうち両側の2脈が顕著である。

成体では以上の如くに区別されるが、幼体で区別する方法、即ち小舌による分類を数年来比較してみても次の識別点を発見した。

3種の検索表

- A₁ 小舌は水平、截形 (Fig.1).....ドクムギ
- A₂ 小舌は截形ならず
 - B₁ 小舌は裂形、部分的に凹凸あり (Fig.2).....ネズミムギ
 - B₂ 小舌は山形 中央部は2.5mm.両端は2mm. (Fig.3).....ホソムギ

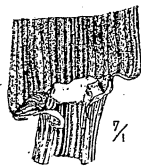


Fig. 1, *L. temulentum* L.
ドクムギ



Fig. 2, *L. multiflorum* La Marek
ネズミムギ



Fig. 3, *L. perene* L.
ホソムギ

(以下14頁へ続く)

これに反し、チマキササは平地の草原、人家の附近を問わず一帯にあり、あの長大な葉は日常生活の器物には、食料品の包物として毎日大いに利用したに相違あるまい。時には開花結実して豊年には貯え、饑饉の年に出して食べたことでもあろう。何しろ他の主食物と異つて、恐ろしく長年月の貯蔵に効くもので、山の辺の農家では何10年と云うものが倉の中に仕舞い込んで、凶年の糧として居ることであり、恐らく万葉人も不時のために貯えたことでもあろう。

最後に信濃のミズズの方言に就いて考える必要がある。ミズズの方言は根曲竹とチマキササの兩種に残っていることを数度信濃路に出張調査して確めて置いた。これは確に上代にはチマキササの独占していた方言が嘉永以後、根曲竹の細工が盛んに行れる様になつて来たので本来のミズズのお株を奪つて了つたものであると考えたい、何故ならばこんな例は我国に極く普通なことであるからである。例えば今日單にクワイと云つてゐるものは古名シロクワイである。昔のクワイ即ち今のクログワイは本邦原産のものであり、今のクワイは中国の原産である。又我々が常に食べる苹果も輸入当初は西洋リンゴと呼んだが現在は單にリンゴと呼ぶ様になり、昔の林檎は今では和リンゴとなつて了つた、動植物名の古今の変遷は時の需要に応じて転々と変わるものである。前述のチマキも食器の代理を務めた時代は押しも押されぬ本家本元であつたに相違なく、

たまに結実する笹の実の成り年にはミズズの名を一層高からしめたものであると思われるが現代の様に食器も安価で便利な衛生的なものがどんどん出来たのでつい忘れ勝となり、それに反して根曲竹は竹細工殊に信濃の養蚕と相俟つて蚕箔を初め蚕具の資材として根曲竹の利用が急騰し、本家のミズズがだんだん近縁の根曲竹の称呼として移つたものである。この臆測は信濃で笹の実でつくつた団子はミズズダンゴと呼ばれ、これからつくつた餡はミズズアメと称えられて、うまくチマキササの葉で包んで遠く東京辺にまで売り出している。読者の中には乞度、あさう云えばネ、と頷かされる方が御ありでしょう。この様に今も古老の間で、或は局部的にチマキササにミズズの名が現存していることを見ても充分、その間のイキヤツを証明している証処と云わねばならぬ。

上の各方面に亘る理由からしてミズズをチマキササと為て軍配固扇を挙げて誰も異議はないであらうと信ずるものである。

(後記)

ミズズに関する文献は頗る多くあるが、各々著者に充分なる植物学の知識がないため、何を指したのか不明なもの多く、明確なる考証を欠き、又、先覺者の知識の孫引き或は數種の説の單なる混合であるために、採るに足らないと認めたので除外した。

(15頁より)

3種の記載

ドクムギ, *Lolium temulentum* L. Fig. 1

1年生にして密に叢生;葉は茎を抱き;関節部(葉鞘と葉身の着点)は両縁で広く、中央背部にて狭くなり基部は葉基(耳)に続く;葉基は茎を抱き2mm、漸尖、鉤状;小舌は膜質、截形、1.2mm;葉鞘は開き脈は顯著にして2本宛平行す;葉身は漸尖、巾5~8mm、中程より先は下垂す、両縁には非常に微細な鋸歯を有する。裏面無毛なるも表面の脈間は疎に細毛を有す;節は紫褐色なり。

ネズミムギ, *L. multiforum* La Marck Fig. 2

多年生にて密に叢生;葉は茎を抱き;関節部は葉基に続く部分は広く背部は狭し、断面は直角状なり;葉基は茎を抱き2mm、先は稍下垂;小舌は膜質、葉基の形、茎の形より小、無毛、嚙形;葉鞘は開く、縁はすりがらす状にて;葉身は巾4mm内外、15~20cm、中程より先は下垂し微細な鋸歯あり、葉裏無毛、葉表軟毛を有す;節は黒紫褐色なり。

ホソムギ, *L. perene* L. Fig. 3

密に叢生する多年生草本にして;葉は茎を抱き関節部は基部で広く背部にて狭し、縁辺は波状形なり;葉基は茎を抱き鉤状にして先を鈍く巻く、1.5mm;

小舌は膜質、中央部は2.5mm、両端2mm、無毛山形;葉鞘は開き長軟毛を疎に生ず;葉身は巾5mm、15~20cmで細長、中程より先は下垂、両縁に細鋸歯を有す。裏面無毛、葉表に軟毛を疎生;節は褐色。

以上の如くに生活体に基ずいてそれらを分類すれば、いつでも3種を区別することが出来るから便利である。他のイネ科植物についてみてもこれらの小舌や葉基の形態によつて分類を試みたいと念願し材料を集めつつある。

最後に親切に御指導下さつた兵庫高校、室井緯先生に厚く御礼を申し上げます。

参考並びに引用文献

- HITCHCOCK; A key to the grasses of Montana, (1900)
 " " ; Manual of the grasses of the United States, (1935) Washington.
 LYMAN CARRIER; The identification of grasses by their vegetative characters; BULLETIN, No. 461, (1947) Washington.
 M. HONDA; Monographia Poacearum Japonicarum, (1930) Tokyo.
 柴田桂太編; 資源植物事典, (1949) 東京